

の夫 私工

地域とつながる「総合的な
学習の時間」の展開
「探究的・協働的な学習を目指して」

岡山市立陵南小学校

教諭 宮本 由美子

※所属・職名は令和7年3月時点



1 はじめに

予測困難な変化の激しい社会の中、子どもたちが課題に対して積極的に向き合い、情報を整理分析し、他者と協働して解決していくことや、新たな価値に気づき、自分の生き方を考えていく資質・能力の育成が求められている。その中で、「総合的な学習の時間」は、重要な役割を果たしていくと感じている。ここでは「地域」「つながる」をキーワードに、実践したことを紹介したい。

2 3年生 地域学習での工夫

① 探究課題と資質能力の設定

「探究課題」とは、「学校が探究を通して児童にどのような資質・能力を育成したいと考えるのかを、学習対象の水俣で表したもの」とされている。単元の展開の基盤として、全体計画に目標と共に位置付けられている。探究課題の解決を通して、「資質・能力の育成のための教材」を考えるには、教師自身が地域の様子を知り課題と授業展開を考える必要がある。

《手掛かりにしたこと》

- ① 公民館だより・ホームページ
- ② 地域の歴史等をまとめた資料
- ③ 学校の沿革史・校歌の歌詞分析
- ④ 地域とのつながり（歩き・話す）

学区内には多くの「生きた教材」があることに気が付いた。

② 課題設定場面の充実

3年生は、探究課題を「町づくりや地域活性化のために取り組んでいる人々や組織」と設定した。地域と連携した体験学習は、児童が自ら学び、考え、主体的に判断し、表現行動できる資質能力を身に付けていくうえで有効だと考えた。

吉備公民館や地域の協力を得て「庭瀬かいわい案内人による地域探検」「撫川うちわ講座」、「白石地区に残る川舟見学」など、地域の魅力に出合う活動に取り組み中で、子どもたちは目を輝かせ、「知

らない人に教えたい」「詳しく知りたい」と思考が流れ、次の学習へとつながった。

③ 「ひと・もの・こと」と繰り返

し関わる探究的・協働的な学習

2学期には、「撫川うちわ」「地域の歴史」「白石地区の川舟」「境目川生き物調査」から探究的に調べたいテーマを選び、4クラス120人がテーマごとのグループに分かれ、地域の方々と関わりながら学習を続けた。興味関心に基づいた学習のため、子どもたちは学びに対して大変意欲的となっていた。



地域の魅力に出合う

今求められている地域学校協働活動は「学校や家庭、地域などの連携により、地域ぐるみで子どもたちの学びや成長、人格形成を支援すること」「学校を核にして地域づくりを推進すると同時に、地域の活性化など持続可能な地域形成を目指すこと」と考えている。その中で「協働的な学び」とは、地域が学校を応援・支援するという一方ではなく、子どもたちの成長を軸に繰り返し関わり、双方

向の関係になることで、地域の活性化にもつながると考えた。

そのため、単元計画が「探究的な学習」となっているのか検証してみた。表に学習活動を整理してみることで、「課題設定」「情報収集」「整理分析」「まとめ表現」がスパイラルに展開されているか、それぞれの活動が、子どもたちが多様な方法を経験することができるようになっていくのか、見直すことが容易であった。



ゲストティーチャーと子どもの関わりを教師は見守りサポートする

グループを分けて地域学習を進めると、互いの学習の様子や成果が気になり、「伝え合う」必然性が生まれてきた。学習発表会では、クイズ・劇・ペープサート・紙芝居など多様な方法で、学んだことを「より分かりやすく伝えるには」という目的を意識して活動に取り組んだ。保護者からもしっかりとした感想が寄せられ、子ども

④「まとめ・表現」の工夫

3年生 総合的な学習の時間「りんりん」学習計画		1～3学期「りょうなんたんけんたい〜りょうなん物知りかせになろう〜」(70時間)	
学区を探検したり、調べたりして「なんだろ？」をみつける		もっと詳しく調べたいことについて調べたり、各人の思いを知る	
学区の魅力をj知ってもらうために、できることを考え実践する			
1学期	2学期	3学期	
課題設定 2年の生活科で学区探検したことを想起したり、校歌の歌詞の意味を考えたりして課題を見つめる。	課題設定 興味関心のあることをもっと調べたい、知りたいことを各人ごとに頼んで教えてもらう計画を立てる。	課題設定 各人さんたちは「どんな思いをもって活動しているのか」という課題に対して予想する方法を考える。	課題設定 お家の人や大人は、陵南学区のすてきなところを知っているのか、どうすればいいか課題を定める。
情報収集 人に聞いた、インターネットでたりして情報を集める。	情報収集 新井川川沿い整備体験白石地区川舟見学2東花民歴史探検境目川生物調査のグループに分かれて活動する。	情報収集 アンケートなどを使って意識調査をする。	情報収集 効果的に知ってもらう方法を考える。
整理分析 分かったことや知らないことを整理する。	整理分析 分かったことや知らないことを整理する。	整理分析 アンケート結果を整理分析する。	整理分析 何を、どのような方法で伝えるか話し合っておく。
まとめ表現 からもっと調べたいことについて見守る。	まとめ表現 陵南学区地図に、どこにどんなものがあるのがある。	まとめ表現 グループごとに〇〇新聞を作った他のグループに伝える。	まとめ表現 度の人さんとも地域の人も、同じ思いで活動していることを知って考えたことをまとめる。



地域について知らないことが多いことに気がついた

3 おわりに

たちに伝えることで、活動の意義に気付くことができた。また、3学期には、地域の方々の思いを知ること、「自分たちができることは何か」を考えた。「大人も子どもも、楽しんで地域の魅力を知ってつなげていくには」とアイデアを出し合い、参観日に「陵南かるた・すごろく」で学びのまとめとした。「つなげ」「伝えたい」、地域のすばらしい「人」「もの」「こと」を言葉や絵で表現することができた。

「地域とともにある学校」に向けて、倉敷市立郷内小中学校の地域と連携した取組を参考に、「つなごう手と手そして心々安心してくらせる陵南学区」をテーマに、4年生の総合を「福祉教育」として、民生児童委員と連携して高齢者等とつながる学習を計画している。5年生では、「防災教育」として安全安心ネットワークと連携した学習を計画している。児童の成長を縦の学年で系統性をもたせて学習に取り組むことで、「地域とともにある学校」を目指したい。

4 今後の展開

「学校教育を支えたい」「できることがあれば協力したい」と思ってくださる地域の方々の協力を得た単元展開は「地域の方と子ども」「地域の方同士」「保護者と地域の方」の交流となり、地域の活性化にもつながったと実感した。

私の工夫

「できる」をみつける、
ふやす、のぼす

～1人1台端末活用の推進～

倉敷市立玉島東中学校

指導教諭 石丸 加奈恵

※所属・職名は令和7年3月時点



1 はじめに

令和5・6年度倉敷市研究指定「1人1台端末の活用」を受け、STAGE3（探究的な学習×主体的なICT活用）をめざした授業実践について研究を行った。多くの生徒が「タブレット（1人1台端末）を使った授業は楽しい」と感じており、学習においてICT機器を活用することで、学習意欲の向上や主体的な学習につながるのではないかと考えた。そこで「自ら学び、豊かに表現し、意欲的に活動できる生徒の育成（効果的なICT活用の推進）」『できる』をみつける・ふやす・のぼす」を研究主題とし、探究活動を取り入れた授業実践をする中で効果的なICT機器活用の方法を探り検証することとした。

2 研究の取組

（1）「効果的なICT活用の推進」の定義づけ

生徒、教員にとってICT機器を活用することにより、学習や指導が「しやすい」「できる」「便利」「した方がよい」という観点（例参照）で検証を行った。

（例）

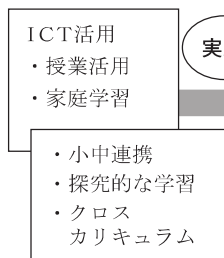
- ・しやすい（例 使いやすい、分かりやすい、見やすい）
- ・できる、便利（例 簡単に計算できる、集計するのに便利）
- ・した方がよい（例 写真を撮った方がよい、拡大した方がよい）

（2）研究体制

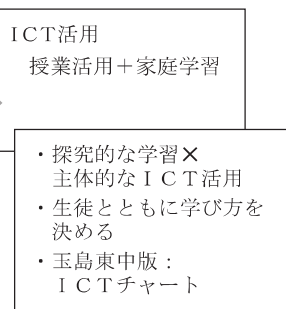
研究が円滑に進むように校内体制の整備の工夫を行った。校内研修や公開授業（中間発表会も含む）等を実施し、研究の過程を検証し、

適宜修正を加えていった。研究1年目は各教科で授業活用チーム、家庭学習チームに分かれ、ICT機器の効果的な活用についてアイデアを出し合ったり実践したりして、それぞれが考える効果的なICT機器活用方法を探った。そして、中間発表会で軌道修正を行い、課題を見出した。

【1年目】



【2年目】



研究体制のイメージ図

工夫①「み・ふ・の（『できる』をみつける、ふやす、のぼす）」を

ICT機器を使うことが目的ではなく、まずは単元において生徒に身に付けさせたい力「み・ふ・の」（例参照）を明確にする。そしてどの場面でICT機器を取り入れるか考えた。

○研究主題との関連

本校の令和6年度の研究主題は、「自ら学び、裕に表現し、意欲的に活動できる生徒の育成（効果的なICT活用の推進）～『できる』をみつめる・ふやす・のぼす～」である。
本単元においては

- 「できる」を（み）つける → 自分の伝えたいことが相手に伝わるレポートを書くことができる。
- （ふ）やす → 自分の考えを説得力をもって相手に伝えるための、根拠を明確にする手立てを増やす。
- （の）ぼす → レポートを互いに読み合うことで、他者のものの見方や考え方を知るとともに、分かりやすいレポートの書き方に気づき、自分のレポートに生かすことができる。

「み・ふ・の」の例

工夫②小中連携
生徒にさまざまなICT機器の活用経験をさせ、より充実した学習にするためにも学区の情報担当者や小中連携の会議をもち、小学校の実態（どのような活用経験をしているかなど）を知り、中学校ではどのように生徒のICT機器活用能力を高めていけばよいか話し合った。

工夫③パイロットティーチャー、OJT（教え合い、学び合い）

各教科
内で研修
を推進し
ていくパ
イロット
ティーチ
ャーを選
出し、I
CT機器
を積極的
に活用し
た授業実
践を行っ
た。また、
GIGA
スクール
推進リー
ダー、情
報教育
主任、パイ
ロットティー
チャーを
中心にICT
機器活用
方法のOJT
（教え合い、
学び合い）
を行い、
教職員一人
一人のICT
機器活用
スキルの
向上を図
った。



OJTの様子



パイロットティーチャーの授業の様子

工夫④クロスカリキュラム（教科横断）

単元計画に探究活動を取り入れることで、授業時数を確保することの難しさが課題として挙げられた。そこで、教科内では網羅で

きない点を、本校の強みである「チーム玉東」…教科、学年を超えた連携（クロスカリキュラム）を視野に入れることで、探究活動を取り入れた授業や家庭学習を行った。

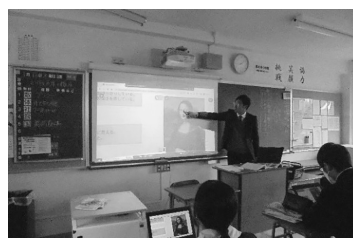
研究2年目は1年目の研究実践をもとに、以上の工夫①～④を取り入れながら授業活用と家庭学習を統合し、授業と家庭学習のつながりをもたせながら、生徒とともに学び方を考え、生徒にとって主体的なICT機器活用となるように実践を重ねていった。その成果を研究発表会で、多くの先生方と共有した。



研究協議の様子



授業の様子（数学）



授業の様子（国語）

3 「できる」をみつける、ふやす、のぼす（成果）

研究の成果として主に次の3点が挙げられる。

①生徒の主体性と学習方法の（幅の）広がり

生徒自身が学習の用途に合わせて学び方を決めて学習したり、他の授業で学んだことや友達の見解をすぐに共有し、自分の考えに取り入れ授業に生かそうとしたりするなど、生徒の学習方法の幅を広げることができた。さらに、遠隔（リモート）で教室に入りにくい生徒や感染症などで欠席した生徒などがリアルタイムで授業に参加できるように教室と同じ環境を整えることができた。

②生徒の学力向上

「タブレットを使うと、学習内容がよくわかる」と回答をした生徒が各学年80%以上を占めた。また、令和6年度に実施した県学力・学習状況調査の結果からも、平均正答率の向上が見られた。

③教員の意識変化と指導方法・技術の向上

教員同士がお互いに教え合い、学び合う姿が校内でよく見られるようになった。ICT機器を活用することで授業準備を効率的に行うことができるだけでなく、同じ

教科に限らず、他の授業ではどのようにICT機器を活用しているか興味をもち、自分の授業ではどのように取り入れることができるかなど自己の授業を振り返り、実践につなげる教員が増えた。

4 おわりに

全教員が研究主題に向けて、同じ方向を向き、さまざまな取組を考え、「できる」ことをみつけ、ふやし、のぼしてきた。この「チーム玉東」のメンバーがいてくれたからこそ、研究主任として私自身、「できる」ことをみつけ、ふやし、のぼすことができたように思う。この研究で得た経験を生かして、これからも



GIGA
Global & Innovation Gateway for All
（全ての子どもたちのための世界につながる新たな扉）